

令和8年度入学 総合政策学部 編入学 一般・推薦 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
総合問題	資料A	間宮 陽介	すきまの効用	『人環フォーラム』35号 2016年 P.1より 一部改変	京都大学 大学院人間・環境学 研究科
	資料B	毎日新聞社	京の人今日の人:『学際』 研究の学術誌を創刊 宮 野公樹さん『学問』問い 直したい／京都	『毎日新聞』 2021年8月15日付より 一部改変	毎日新聞社
	資料C	リクルート進学総研	学部・学科トレンドデータ集	2022年 < https://souken.shingakunet.com/higher/2022/04/post-3268-16.html >より リクルートカレッジマネジメント232号 (Apr.-Jun.2022)	リクルート 進学総研
	資料D	NHK	キーワードでみる年表 平成 30年の歩み	2019年 < https://www3.nhk.or.jp/news/special/heisei/chronology/ >より 一部改変	NHK
	資料E	朝日新聞社	ことば抄:東京大学新学 長・吉川弘之さん	『朝日新聞』 1993年4月14日付夕刊 より 一部改変	朝日新聞社
	資料F	隠岐 さや香	文系と理系はなぜ分 かれたのか	2018年 pp.233-234 より 一部改変	星海社

令和8年度 編入学（一般・推薦）

総合政策学部

総合問題 (120分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、7ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

資料 (A) ~ (F) を読み、設問 1 ~ 5 に答えなさい。

- 1 資料 (A) の下線部 (a) にある「すきまの効用」とは何か。効用として挙げられている 2 つを、それぞれ 60 字以内で答えなさい。
- 2 資料 (B) の下線部 (b) に「大学や学術界のあり方に疑問が膨らむようになった」と記されているが、どのような疑問か。150 字程度で答えなさい。
- 3 資料 (C) 及び資料 (D) を読んで、正しいものを下記から選びなさい。
 - ① 2008 年～2012 年は、好景気によって、法学や外国文学といった、いわゆる「文系」に類する分野を学ぶ学部の人気があがった。
 - ② 2015 年～2018 年は、景気の急激な悪化によって、機械工学や薬学といった、将来の就職との関係が比較的明確な分野が学べる学部への進路を選択する学生が全体的に増加した。
 - ③ 2019 年～2021 年は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、データサイエンスや情報への関心が高まり、その分野を学べる学部の志望者が増加した。
 - ④ 2008 年～2021 年まで、一貫して化学や生物学といった、いわゆる「理系」分野が増加傾向で、法学や外国文学といった、いわゆる「文系」分野の志願者は減少傾向である。
 - ⑤ 上記の中に正しいものはない。
- 4 あなたは、これまでの専門教育の経験において資料(B)の下線部 (ア) にあるような、「役立つこと」を学んできたでしょうか。あるいは、下線部 (イ) 『役立つとはどういうことか』といった問いを含めて学んできたでしょうか。具体的な経験を述べつつ、300 字以内で述べなさい。
- 5 資料 (C)・(D) で分かるように、大学受験者は経済的状況におおきな影響を受け、「役立つ」能力を学ぶために学部を選んでいる傾向があります。また、資料(A)・(B) は学際的な教育の課題を提示していますが、これに対して資料(E)・(F) は、学際性がなぜ重要なのかを説いています。これらの資料の内容を簡単に整理したうえで、学際性を強調する岩手県立大学総合政策学部を受験するために、こういった姿勢で学ぶ必要があると考えますか。自身の考えを 600 字以内で述べなさい。

資料 (A)

以前からその気味はあったのだが、近ごろ方向音痴がよいよひどくなり、最近では地図を片手に目的地を目ざしても、まっすぐ目的地にたどり着くことができない。大学のキャンパスも私にとってはさながらクレタ島の迷宮、建物の間に迷い込むと、とたんに方向感覚を失い、どういうわけか目的とは正反対の方向をさまよひ歩くことになる。

はじめて訪れる大学ならいざ知らず、なんどもいったことのある大学、いや私が学生時代を送った東京大学でさえ、久しぶりに訪ねてみると、迷路と化していることを思い知る。赤門を入るとすぐ目の前に経済学部の建物があり、事務室はその建物の中にあつたはずだ。だが事務室は今では別の棟にあり、そこまで行くのが一苦勞である。事務室で用を済ませて外に出ると例によって方向が分からなくなり、キャンパスをあちこちさまよひ歩いたあげく、通りすがりの学生に、「赤門はどこですか？」と訊くというていたらく。やっと赤門を出たころには、私の衣服はそぼ降る秋雨でびしょぬれになっている。

確かに老化現象ということはあろう。私の場合、この老化現象は京都大学の吉田南キャンパスに新しい建物が次々に建ったころから始まったらしい。とくに正門を入れて右手にある吉田南一号館は鬼門で、行きはよいよい帰りは怖い、入るときはいいが、建物を出ると、一瞬、見なれぬ光景に上下左右の感覚を喪失するのであつた。

しかし方向感覚の弱体化を年齢のせいだけにすることはできない。街中より大学キャンパスのほうが症状をひどくするのは、キャンパスのほうが建物の混雑度がひどいからである。東京の私立大学にはかつて広大な敷地を求めてその一部を郊外に移転するものが多かったが、昨今の都心回帰で旧キャンパスに戻る例が相次いでいる。そうなればただでさえ狭い敷地を活用せざるをえず、猫の額のような空き地を建物でびっしりと埋めていくことになる。一方、国立大学も、法人化を前にした建設ラッシュでキャンパスの相貌を一変させ、キャンパスは迷路のような観を呈するにいたつたのである。

キャンパスの混雑は学問世界の混雑と表裏一体となっている。かつての大学は法学、理学、文学といったいわゆる「一文字」学部が主体となつていたが、いまでは〇学と△学のすきまが〇△学によって埋められ、さらにそのすきまが新々種の学によって埋められるというふうに、学問間のすきまがびっしりと諸学によって埋められ、その諸学に見合う学部が新設されている。これはべつに学問世界だけの話ではない。テレビで見る評論家には政治評論家や経済評論家だけでなく、家事評論家、整理整頓評論家、ラーメン評論家など、じつにさまざまの評論家が需要に応じて番組の舞台回しの役を演じている。

これも時代の趨勢なのだろう。自然は真空を嫌うように、人間はすきまを嫌い、そのすきまを埋め尽くさなければ気がすまないのかもしれない。しかしすきまにはすきまの効用がある。すきまがあるために物事の位置関係が明確になり、見通しをよくする。また、すきまの存在によって想像力の飛翔が可能になることは誰でも経験するところだろう。宴席のスピーチで、街頭の演説で、事細かな原稿を準備するのは愚の骨頂である。原稿に頼ると言葉の流れが鋳型にはまって窮屈になり、鋳型から少しでもはみ出してしまうと言葉の流れが方向感覚をなくして、あわてふためく。それよりは要点を限ってすきまを残し、自由の余地を

広げておいたほうがよほど実用的であり、またイメージーションも膨らむ。

とはいっても、これは強度の方向音痴の負け惜しみの弁かもしれないが。

(間宮陽介「すきまの効用」『人環フォーラム』35号、京都大学 大学院人間・環境学研究科 2016年、
p.1, より一部改変)

資料 (B)

(以下の文章は、新聞記者が大学教員の取り組みを取材した新聞記事の一部である)

大学で流行して久しい言葉に「学際研究」がある。「研究分野を超えた連携」といった意味で、新たな視点による課題解決やイノベーションの促進が期待されている。国が推進し、大学関係者も好んで使うが、世間に浸透しておらず、実態も見えにくい。

「国内に『学際』をうたう大学組織は 50 以上あるが、学際研究の学術誌は一つもない。それはおかしいのでは」

そんな疑問から、「日本初」という学際研究に特化した学術誌「といたうとい」の創刊を思い立った。准教授を務めている京都大学の学際融合教育研究推進センターから 7 月、創刊準備号を発刊した。

青い表紙が目を引く同誌は、研究内容と直結しない芸術的な写真を多用し、余白を残したレイアウトなど雑誌のような仕立て。専門的な論文が素っ気なく並ぶ学術誌と一線を画し、読みやすさを重視した。解剖学、精神医学、ロボット工学など一見分野の異なる 8 本の論考が載っている。

特に工夫したのが、掲載過程の公開だ。学術誌といえば、投稿論文を掲載前にその道の専門家が読み、掲載の可否や修正などを意見する「査読」が付き物。質を担保する意味があるが、その過程は通常、外部に見えない。同誌は査読ではなく「対話」と位置付け、各論考の筆者と同誌の編集委員や異分野の有識者との、完成までのやり取りも読めるようにした。

「分類や専門で区切ることができない多様なテーマと問いから、学問に挑む『対話型学術誌』ができた」と出来栄に胸を張る。A4 判 112 ページで 3,300 円。大手通販サイトのアマゾンでも販売を始めた。来年以降、本格的に年 1 回刊行する方針だ。

この試みの背景には、大学の現状への危機感がある。現在は学問論や科学技術政策を専門としているが、元々は立命館大学で金属組織学を学んだ理工系の研究者だった。「新たな金属材料を作り出すことに燃えていた」が、次第に①大学や学術界のあり方に疑問が膨らむようになったという。

「大学は『学問』をする：場所なのに、やっていることは『研究』ばかり。」②『役立つこと』ばかりが期待され、③『役立つとはどういうことか』といった問いが重視されない」

現状を変えたいと、同センターで 5 年前、分野を超えた対話の場を始めた。大学の教員や大学院生らが研究テーマや根源的な問いに対する回答をボードに掲示し、来場者が意見を書き込む。互いに匿名とし、肩書にとらわれず本音の意見交換から共同研究につなげる狙いだ。「京大 100 人論文」と題した取り組みで、他大学にも広がっている。

学術誌の創刊も、その延長線上にある。「学問は本来、学際的なはずなのに、どんどん細分化されているのが現状」。だから、学際研究を深めるのは、学問本来の形を取り戻すことだと位置付ける。「多くの人に読んでもらい、学問を問い直すきっかけにしていきたい」

(『毎日新聞』2021 年 8 月 15 日付、「京の人今日の人：『学際』研究の学術誌を創刊 宮野公樹さん 『学問』問い直したい／京都」より、一部改変)

資料 (C)

大学における分野ごとの志願者の一覧 (増加)

増加								
2008年-2012年			2015年-2018年			2019年-2021年		
順位	学科系統	増加人数	順位	学科系統	増加人数	順位	学科系統	増加人数
1	看護学	37,532	1	経済学	90,298	1	情報工学	5,596
2	教育学	26,118	2	経営学	67,173	2	医療技術学	2,837
3	医学 (専門課程)	22,079	3	法学	50,937	3	数学	287
4	医療技術学	13,827	4	商学	49,225	4	地球・宇宙学	268
5	栄養・食物学	11,709	5	社会学	37,872	5	デザイン	194
6	保育・児童学	11,367	6	看護学	22,281	6	電気工学	143
7	生命科学	10,886	7	情報工学	21,375	7	舞台・演劇学	128
8	心理学	10,766	8	心理学	21,216	8	音楽	-13
9	情報工学	7,021	9	国際関係学	18,626	9	服飾・被服学	-73
10	語学 (外国語)	6,814	10	総合政策学	15,950	10	住居学	-103
11	応用化学	6,164	11	建築学	13,507	11	経営工学	-122
12	歴史学	4,739	12	語学 (外国語)	11,643	12	環境科学	-125
13	物理学	4,439	13	歴史学	11,173	13	考古学	-149
14	スポーツ学	3,694	14	政治・政策学	8,119	14	言語学	-177
15	リハビリテーション学	2,897	15	外国文学	7,300	15	原子力工学	-187
16	建築学	2,842	16	スポーツ学	5,692	16	マスコミ学	-219
17	農学	2,646	17	文化人類学	5,626	17	図書館情報学	-278
18	機械工学	2,539	18	観光学	5,523	18	通信工学	-341
19	地理学	2,295	19	日本文化学	5,420	19	システム・制御工学	-436
20	日本文化学	2,182	20	哲学・宗教学	5,204	20	航空・船舶・自動車工学	-481

(リクルート進学総研『学部・学科トレンド データ集』, 2022年,

< <https://souken.shingakunet.com/higher/2022/04/post-3268-16.html>>より)

大学における分野ごとの志願者の一覧 (減少)

減少								
2008年-2012年			2015年-2018年			2019年-2021年		
順位	学科系統	減少人数	順位	学科系統	減少人数	順位	学科系統	減少人数
1	経済学	-30,261	1	薬学	-14,246	1	経済学	-60,668
2	法学	-26,132	2	機械工学	-11,093	2	経営学	-52,750
3	経営学	-24,782	3	栄養・食物学	-6,595	3	法学	-50,605
4	商学	-24,163	4	保育・児童学	-3,749	4	商学	-34,982
5	外国文学	-10,137	5	化学	-3,154	5	社会学	-25,703
6	政治・政策学	-7,717	6	リハビリテーション学	-2,876	6	外国文学	-24,421
7	社会学	-7,518	7	農学	-2,717	7	教育学	-23,029
8	国際関係学	-4,650	8	経営工学	-2,496	8	語学 (外国語)	-18,714
9	デザイン	-4,643	9	生物学	-2,434	9	医学 (専門課程)	-15,359
10	美術	-3,776	10	物理学	-2,281	10	薬学	-15,145
11	歯学 (専門課程)	-3,116	11	応用物理学	-1,400	11	国際関係学	-14,193
12	福祉学	-3,038	12	応用化学	-1,180	12	心理学	-11,046
13	薬学	-2,916	13	環境科学	-1,146	13	歴史学	-10,727
14	人間科学	-2,411	14	歯学 (専門課程)	-995	14	機械工学	-9,963
15	応用物理学	-2,087	15	生活科学	-731	15	福祉学	-9,786
16	獣医・畜産学	-2,079	16	獣医・畜産学	-729	16	総合政策学	-9,013
17	文芸学	-1,802	17	保健衛生学	-304	17	政治・政策学	-8,916
18	画像・音響工学	-1,651	18	航空・船舶・自動車工学	-300	18	日本文学	-8,034
19	日本文学	-1,374	19	地球・宇宙学	-147	19	観光学	-7,950
20	メディア学	-1,044	20	服飾・被服学	-54	20	看護学	-7,313

(リクルート進学総研『学部・学科トレンド データ集』, 2022年,

< <https://souken.shingakunet.com/higher/2022/04/post-3268-16.html>>より)

資料 (D)

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません。

(NHK『キーワードでみる年表 平成30年の歩み』, 2019年

< <https://www3.nhk.or.jp/news/special/heisei/chronology/>>より, 一部改変)

資料(E)

(以下の文章は、1993年の東京大学入学式における東京大学総長の入学者への式辞の一部である)

人類は、長い間外敵に悩みながら、それらを制御する方法を見だし、安全で快適な生活環境を築き上げてきたと考えられます。外敵には、洪水や地震、病原菌、邪悪な権力者なども含まれます。例えば、古代ギリシャの哲人たちは、権力者の非合理性を迫り、その方法は、論理学、哲学として生きています。ペストとの長い闘いで得られた細菌学は、ペストを制御可能にしました。

このように多くの学問は、邪悪なるものからいかに自らを守るか、が出発点になっています。

現代は、新しい邪悪なるものが発生しつつあります。新しい型の貧困、人口爆発、地球環境破壊、新しい病気、新しい民族間紛争などです。安全で豊かで、楽しみの多い世界を作ろうとした努力が、新しい現象を引き起こしているのです。現代は、学問体系の再構成という、新しい課題に向かわねばならない時代かもしれません。

しかし、学問体系の再構成があるとしても、長い年月がかかるはずで、私には、できるだけ多くの学問領域に触れておくように、としか提案できません。

専門家も学生も、感受性は同じです。飢餓でやせ細った人々、事故の悲惨な情景、乱開発で緑のなくなった山を見るとき、恐ろしいと感じる感受性を等しく持っており、これらのない社会を望む気持ちにおいて、変わりはないのです。その意味で、皆さんと私たちは連携しなければならない仲間だと、私は信じます。

(『朝日新聞』1993年4月14日付夕刊、「ことば抄：東京大学新学長・吉川弘之さん」より, 一部改変)

資料(F)

人間の理性の限界という問題があります。実際、本人は真剣に研究をしている場合でも、無意識のバイアスで、ある証拠を完全に見逃し、自分の論点を支持する証拠ばかり集めるということがありうるからです。19世紀において、女性の知性が男性に劣るとの見解を出したいくつかの研究には、明らかにこのような傾向がみられました。

(中 略)

私たちはバイアスのかかったやり方でしか世の中を見ることはできませんが、諸分野の方法というのは、地域や文化を超えて人々が選び取ってきた、いわば、体系性のあるバイアスです。体系的なやり方で、違う風景を見て、それを継ぎ合わせる。または違う主張を行いながらも、それを多声音楽のように不協和音も込みで重ねあわせていく。そのことにこそ、様々な分野が存在する本当の意義があるのではないのでしょうか。

(隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』, 星海社, 2018年, pp.233-234より, 一部改変)